シンポジウム「環境と歴史地理」開催に当たって

日　下　雅　義

本学会は，平成元年度から新しい発表形式をとるようになった。すなわち，２年間をセットとしてとらえ，初年度に共同課題を設定して会員から発表を募り，つぎの年に同じテーマでシンポジウムを行うという方法である。第１回の共同課題は「変革期の歴史地理」，２回目は「東北日本と西南日本」であった。

３回目の今回は，「環境と歴史地理」という課題がすでに設定され，平成５年５月に愛知大学で課題発表が行われた。これはスコープがあまりにも大きいため，シンポジウムでは内容を「歴史をとらえるための手段と方法」に絞り込み，さらに民俗資料，古地図（各種の絵図），地籍図，および古文書（古典ほか）に限定して行うことになった。古地理を復原する際には，これらの各種資（史）料が相互補完の関係をもつ。

ところで，これまで自然サイドに，より大きい関心をもってきた私にとって，このような絞り込みは，自縄自縛の感がしないでもないが，それはともかくとして，上のような資（史）料が，地域の歴史（過去の環境・景観・生活様式など）の把握に対してどのような役割を果たすのか，より具体的には，これらを用いることによって，何が，どこまで明らかになるのか，また歴史学や文学，民俗学など隣接科学からのアプローチとどのように異なるのか，などについて検討を加えていただきたいと思っている。

近年，微化石（花粉・プラントオパール・珪藻・火山灰など）分析や衛星写真の画像処理技術が進み，歴史地理学（とくに歴史的環境の復原）に，ひとつの新しい地平が開かれたといえる。本日ここで取り上げる資（史）料は，いずれも伝統的なものであるが，研究視点や方法を通して，歴史地理学がもつ独自性と存在意義を改めて明確にするとともに，全く新しい何かを大胆に打ち出してほしい。積極的な“攻め”の姿勢を絶えずとり続けない限り，研究内容が多様化し，学際的なアプローチが進む現在，この学問分野が埋没してしまう恐れがある。

以上のような問題意識から，今回は第一線で意欲的に研究を進めておられる若手，中堅の方々に報告をお願いした。平均年齢は42歳であり，前回より21歳ほど若い。時間は限られているが，学界の将来のために，忌憚のない，そして斬新な見解をどしどし述べていただきたいと思っている。コメンテーター及びご出席のみなさんにも，同様のことを希望したい。

（徳島文理大学文学部）